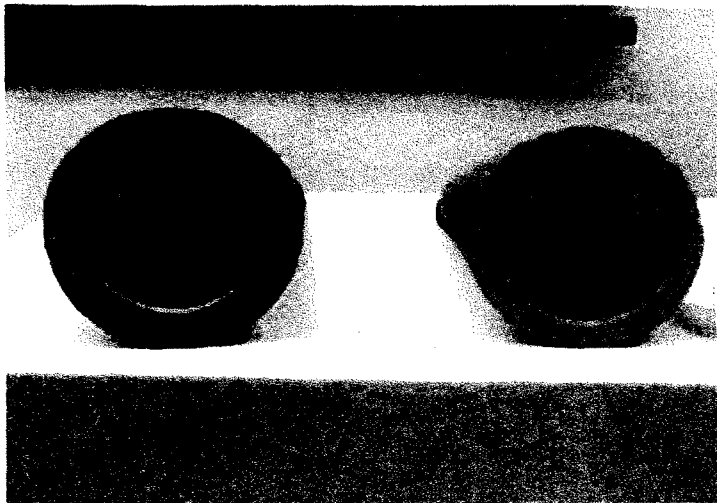


九月バス例会

吉備穴の海の史跡めぐり

～早島、妹尾の史跡を訪ねて～



戸川氏の常紋「三本杉」

替紋「梅鉢」

2012年9月23日

備陽史探訪の会

歴史民俗研究部会 種本実

【日 程】

集合・・・・・・・・・・7時45分 福山駅北口

出発・・・・・・・・・・8時

早島町役場着・・・・・・・・9時 ～ トイレ

早島陣屋跡・・・・・・・・9時30分

戸川記念館・・・・・・・・9時50分～10時10分 説明を聴講、見学

竹井将監の五輪塔・・10時30分

金毘羅街道跡燈籠・・11時

龍神社・・・・・・・・・・11時30分 ～ 古い町並みを散策～歴史民俗資料館見学

中央公民館着・・・・・・・・12時 ～ 昼食 ～ トイレ

歴史民俗資料館と

花ござ手織り伝承館で実演と説明・・・・・・・・13時～13時30分

舟本港跡・・・・・・・・・・13時40分

弁才天港跡・・・・・・・・・・14時10分

鶴崎神社・・・・・・・・・・14時30分～15時 トイレ バスに乗車

妹尾マルナカ着・・・・15時30分 トイレ

御前神社・・・・・・・・・・15時50分～16時10分

盛隆寺・・・・・・・・・・16時30分～16時50分

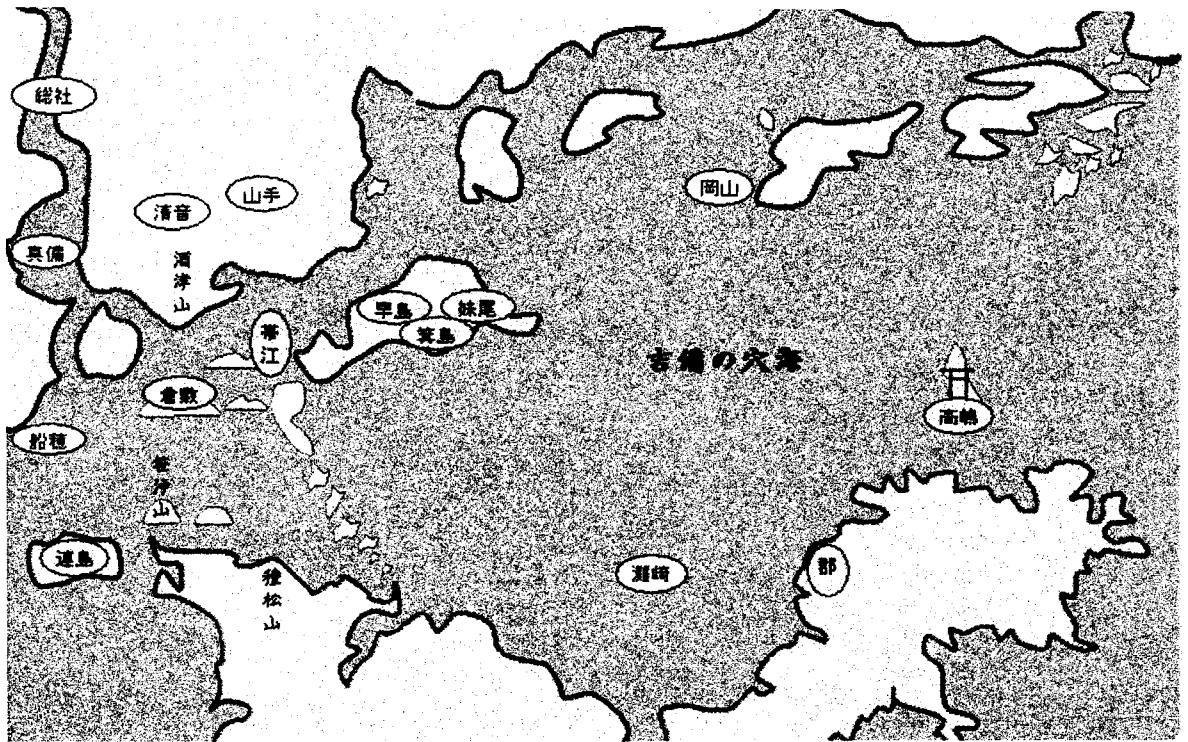
陣屋跡の井戸・・・・・・・・17時 ～ 古い町並みを散策

妹尾マルナカ発・・・・17時30分

福山駅北口着・・・・・・・・18時30分

【当例会の狙い】

- ① 吉備穴の海の干拓の歴史について
- ② 戸川氏について
- ③ 早島の特産の蘭草、畳表、花ござについて
- ④ 妹尾兼康について
- ⑤ 吉備津彦の伝承を語る神社に参拝
- ⑥ 石造物を観る



〈上記の図は『HP岡山の風 郷土史』より引用〉

この早島周辺から南西側にかけて、島と名が付く地名が非常に多い。一番大きな児島を筆頭に、水島、玉島、柏島、乙島、連島（つらじま）、中島、松島、箕島（みしま）など。

■早島町・・・岡山市と倉敷市に囲まれた町。 かつて吉備の穴海に浮かぶ一つの島であったが、平安中期頃から島の一部で干拓が始まり、本州と陸続きとなった。鎌倉期には備中国都宇郡のうち「隼島荘」。 江戸時代は、旗本戸川家の陣屋町として栄え、町の南部に広がる児島湾の干潟を干拓し、い草を植えた。

正徳2年(1712)年に編纂された百科事典『和漢三才図絵』には、このい草で織ら

れた畳表の産地として備中国を挙げている。早島で織られた畳表は「早島表」の名で大坂や江戸に出荷され、滝沢馬琴の小説『夢相兵衛胡蝶物語』に「近頃表がへした早島の席薦（タタミ）へ心なく酒をこぼすとき……」とその名が紹介されるなど、早島の名は畳表のブランド名として全国に知られた。明治時代、新たに花筵（花ごぞ）産業が興ると数多くの花筵工場が創立され、『い草とい製品の町』として発展していった。

■畳の年表

縄文時代（BC7000年頃～）農耕生活が始まったこの頃から、竪穴住居にワラを敷くようになった

古墳時代（300年頃～）高床式住居ではムシロの敷物が使用された 奈良県・円照寺墓山古墳・岡山県・金蔵山古墳で、ムシロ使用 〈古墳から出土したのは 畳に織り上げた 矢ジリのケースが確認されている。〉（岡山県立博物館所蔵） 奈良時代（710年頃～）「古事記」に菅畳、皮畳、の記載 「日本書紀」に八重席薦（やえむしろこも）の記載 「海神（わたつみ）、是（ここ）に八重の席薦（たたみ）を鋪設（し）きて、延（い）て内（い）る。坐（まし）て定（しず）まる。」 聖武天皇のベットにわらの畳が敷かれる 工匠として畳技術者が出現（奈良・平安時代） 「続日本記」に備前国出身の秦乃良（はたのとら）が長年畳を制作した功績で外従五位の位を得た記載

平安時代（794年～）寝殿造りの邸宅内に置畳が配置される。敷物としての畳の登場。しかし、貴族は畳・庶民はムシロ、コモが一般的 「延喜式」に広席、狭席、短畳や、位による畳の規定の記載 身分によって畳の大きさ、厚さ、畳縁の色が定められる 「枕草子」に「御座といふ畳のさまして、高麗などいと清か」の記載 「今昔物語」に藺笠などイグサ製品名の記載 後白河院が備後国河北荘へ畳、御座などの貢納を命ずる

鎌倉時代（1192年～）武家屋敷の寝所に畳が敷きこまれる 畳から布団が分化する

室町時代（1392年～）書院造りの普及により座敷飾りが確立され格式による規定が生まれる 小さい部屋割りが行われ、畳の敷き詰めがほぼ定着する 綿布団の普及により町家農村にも畳の敷きつめが広がる

安土桃山時代（1573年～）城郭の造営などにより畳屋町が形成される 安土城行幸の間に備後表を使用 千利休の四畳半茶室

江戸時代（1603年～）数奇屋造りの普及で、畳割りによる基準でき重要視される。江戸・大坂で仲間組合の設立 庶民の家でも畳の敷き詰めが行われ畳の消費が増大 畳奉行が出現。

畳の生産量…平成22年度は約400万畳、平成14年度の約半数である。中国産は約900万畳である。



【御床】



【御床畳残欠】

■伝説 仲哀天皇が神功皇后と共に熊襲を討ち都へ帰還の途次、二子山高島居の址（現在の倉敷市中庄地区二子）に仮泊した。この時あたりに繁栄している野草の美しさをめでた。物部の浦人が「御座」を作ると、皇后はおおいに喜んだという。現在の「莫菴（ござ）」と云う言葉は〔御座〕より転用されたとも。

●両児神社（ふたごじんじや） 倉敷市中庄地区松島に鎮座し、御座八幡宮として崇敬されてきた。明治五年に両児神社と改称。

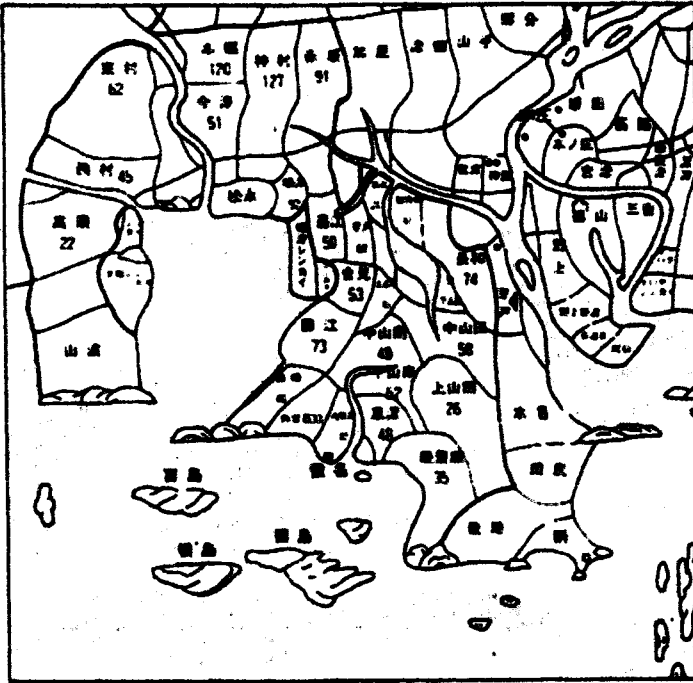
※備後表・・・天文、弘治（1532～57年）の頃、山南村（現在の広島県沼隈郡沼隈町）で水田にい草を栽培して引通表を織ったのが始まりといわれる。その声価は織田信長が安土城天守に「畳は備後表に高麗縁」として用い、豊臣秀吉を祀る豊国神社に備後表が使用された記録が見られる。慶長7（1602）年福島正則が江戸幕府に3100枚献納したのが例となつて、備後表は日本最高の畳表として、水野・阿部と公儀御用が続き、その製造には献上表改役（あらためやく）や表奉行が任じられ管理に当たつて、蘭（い）草の栽培から畳表の製作にいたるまで、保護統制が行われていた。江戸時代初め沼隈郡山南の長谷川新右衛門が、短い蘭草



の先を交差させて織りあげる中継（なかつぎ）表を考案し備後表の量産が可能となり、商用畳として他領へも売り出し、これに運上を課して藩の重要な財源としていた。福山城下町入り江に近く蘭町が存在し、領内産出のすべての畳表はここに集荷され、畳表改役の検査を経て、江戸・大阪・堺の御用畳請負商人に引き渡されていた。廃藩後は自由販売となったが、業者は備後本口畳表同業組合を結成し、品質の維持向上を図り、販路の拡張策を講じた。織機は明治31年に岡山県から足踏式織機（あしぶみしきおりばた）が導入され、昭和に入ると動力式織機（どうりよくしきしょつき）が開発され生産量は飛躍した。

○このページの図、写真は『広島県立歴史博物館・編 備後表』より引用

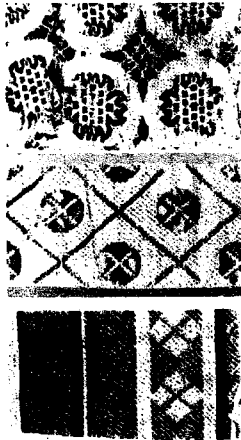
沼隈郡内の織村と織機数 慶安元年(1648)



織村26村織機総数1528台「山南村誌」から一郡境一村境
地図は「福山誌料」から

このつを有年し此のり夫年ハ雙
々として下く輝き中や内なる
許量極は古くも見るも古縁
のり二回の織物・皇古向に
作しては織物一はもく今も
学よと織物古縁古くもま

重要文化財 備後記
(安土城で使用の備後表)
慶長15年(1610) 岡山大学附属図書館



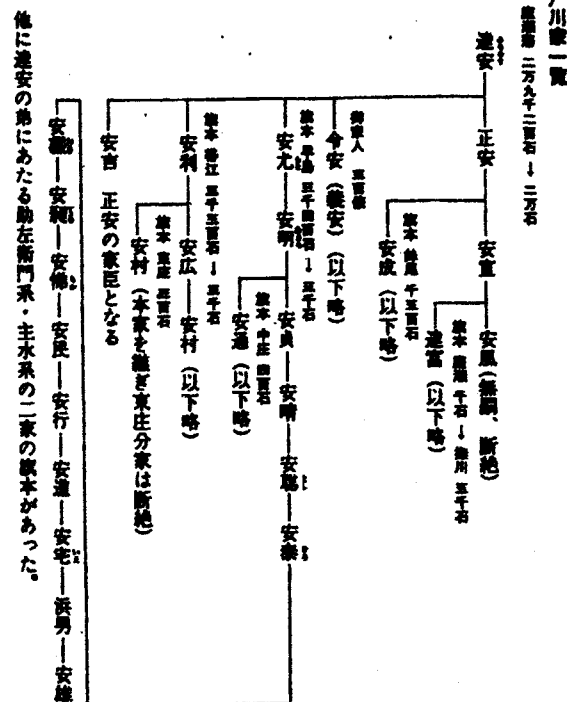
だいもんこうらいべり こもんこうらいべり うんげんべり
【上から大紋高麗縁・小紋高麗縁・縹網縁】 身分の最高位の天皇や法皇は縹網縁、親王や大臣は大
紋高麗縁、公卿は小紋高麗縁、僧侶や学者など及び四位、五位の位の者は紫縁、侍、及び六位の者
は黄縁を用いるように決められていた。

■戸川氏・・・初代・戸川秀安は母が宇喜多忠家の乳母であった関係で宇喜多氏に仕え、三村氏

や毛利氏など数々の戦いで勲功を立てた。天正3（1575）年には常山城主となり、2万5000石を領して、宇喜多氏第一の重臣となっていた。天正14（1986）年頃、従五位下肥後守となり間もなく隠居した。

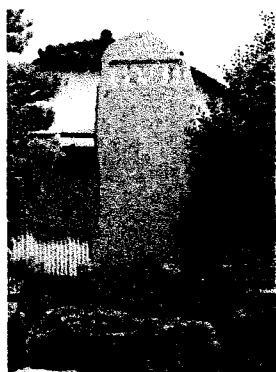
秀安の跡は達安（みちやす）が継いだ。達安は、若い時から備中高松城攻め、九州征伐、小田原征伐、文禄・慶長の役など主要な合戦に参陣した。文禄元（1592）年国政を宇喜多秀家から任されたが、慶長5（1600）年1月、御家騒動（宇喜多騒動）により徳川家康に預けられ常陸国で蟄居した。同年の関ヶ原の戦いでは徳川軍として参戦、島左近を討ち取る軍功を立てた。戦後、備中国・庭瀬藩主となり2万9200石を領有しその後も大坂の役に参陣した。

達安の跡は正安が継ぎ、その際寛永5（1628）年に弟の安尤（やすもと）と安利にそれぞれ早島



3400石と帯江3300石を分知した。正安の跡は安宣が継ぎ、寛文9（1669）年弟の安成に妹尾1500石を分知した。安宣の跡は安風が継ぎ、弟の達富に1000石を分知したものの、安風は延宝7（1679）年9歳で死去し無嗣断絶で改易となったが、宗家の名跡は弟の達富が5000石の旗本（交代寄合）として家名存続することを許された。

■前潟開墾碑・・・前潟地区は町南部の市街地を背景にした広大な水田地帯（50ha）で、整然



と配置された水路網や農家集落とともに、広々とした田園風景を見せている。この地域は、文化庁調査による文化的景観基礎データに採用された重要地域であり、全国でも有数の田園景観と言える。江戸時代に干潟の開墾がすすみ、寛文7（1667）年には、早島の庄屋を中心に早島東西の村々が協力して眼前に広がる干潟の開墾に取り組んだ。工事はたび重なる堤の決壊や資金不足などのため、度々中断するなど困難をきわめ、12年を費やして延宝7（1679）年に最後の汐止めが完成した。そして、新たに開かれた約100町歩の大地は、陣屋の前にある干潟を開墾したことから前潟新田と名づけられた。干拓地では稲作が行われたが、その裏作として藎草が栽培された。塩分に強い藎草は干拓地に適し、たちまち全国有数の産地となった。加工品の量表は早島表と呼ばれ、大坂方面と商取引を行っていたが、寛政4（1792）

年、問屋・大仲買・小仲買合わせて67軒ほどが株仲間を形成、流通機構も整備されて天保年間(1830年頃)には江戸へも出荷されるようになっていた。大正7年、前潟開墾250年を記念して記念碑(写真)が建てられた。記念の式典には早島戸川氏13代目の戸川安宅(やすいえ)氏も出席した。



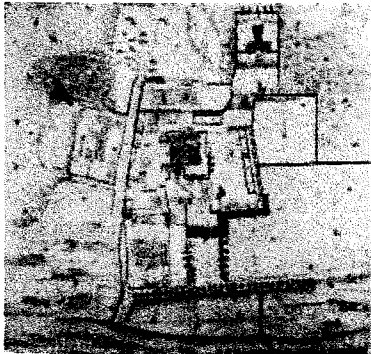
＜国境の碑 瀬戸大橋線 早島駅より南東＞

従是東南備前国

干拓に伴い新たに土地が生まれたことによって備前・備中の境界線が約100年に渡り争われた。文化13(1816)年に幕府がこの場所を境界とする裁定を下した。同様の碑はこの付近に10箇所建っている。

■早島の陣屋・・・元禄年間、2代安明の代に普請にとりかかり17年の歳月を費やして宝永6(1709)年に完成した。陣屋は敷地全体が堀と塀によって囲まれ、東西約65メートル、南北約120メートル、約7,800平方メートル(約2,500坪)の広さを有し、その中には役人たちが仕事をする役所や裁判を行う白洲をはじめ、道場や年貢を納める米蔵などが置かれていた。また、主だった家臣たちの住居も敷地内に定められ、陣屋の裏山には家祖の戸川達安を祭る達安大明神の社もあった。しかし、この陣屋も明治の初めごろ取り壊され、現在ではここにある堀の一部と表門前の石橋(写真)、陣屋の飲料水として使われた井戸などを残すのみとなったが、旗本領の陣屋の遺構として貴重な史跡である。明治3年の記録によれば、家老から御膳代御足軽まで65人、御抱足軽30人であったが大部分は江戸詰めであったと思われる。

■陣屋町 元和元(1615)年の一国一城令により、岡山では城郭を構えた城下町は、岡山・津山・松山(高梁市)にかぎられた。大名でもそれ以外のものは陣屋を構えるにとどまり、旗本や大名の家老も知行地に陣屋をおいた。この陣屋を中心に形成された町場を陣屋町という。大名の陣屋町としては、美作の勝山・備中の新見・成羽・足守・岡田・浅尾・庭瀬・鴨方などがあり、旗本の陣屋



町としては早島(戸川氏)・妹尾(戸川氏)・撫川(戸川氏)・井原(池田氏)が代表的なものである。これらの陣屋町は、陣屋を中心に武家町・町人地・寺社が計画的に配置されており、小規模ではあるが城下町と同じような空間構成をとっている。ただし、武家地と町人地を囲む惣構えの堀などは形成されないことが多い。

※近年、石橋の手すりから

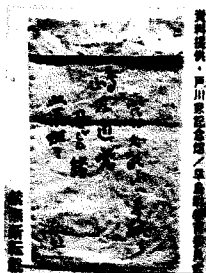
「文化三 丙寅年 四月

備後尾道 石工 □□屋和作 助 の文字が発見された



■戸川家記念館・・・陣屋の書物蔵を改造した建物 戸川家に伝わる具足や家紋入り馬印など貴重な品々 関ヶ原合戦において戸川達安が島左近を討ち取った左近着用と伝える鎧兜が同家に保存されていた。鎧は焼失したが兜は久能山東照宮博物館に、忍緒が戸川家記念館に現存する。

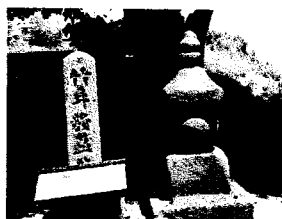
【以下の文章と写真は、HP『SCOOP 島左近の遺品』より一部を引用】



「権現様被聞召立、上杉景勝為御退治奥州御発向之時、肥後守達安儀被召出御供仕候處、石田治部少輔三成逆乱に付、御人数濃州関ヶ原へ被指向候砌、最前郷渡川を渡り川向にて一番槍を合、自身敵討取申候。其敵石田治部少輔三成臣嶋左近(名乗不詳)、蒙御感之仰此時達安備中国於庭瀬居所被下置(中略)嶋左近其之節之鎧戸川定太郎家に有之候処、先年類焼之節焼失仕候。同兜内藏助家に有之候、右之趣前々より申傳候」 (『早島町史』所収「戸川安宅氏直話筆記」句読点は後補)

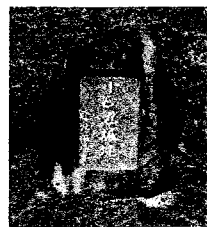
「資料に見える通り、当時は左近の鎧も「定太郎家」に保管されていたと見られるが、惜しくも火災に遭って焼失してしまったようである。また兜を保管していた「内蔵助家」とは、戸川肥後守達安の子安尤(やすもと)に始まる旗本早島戸川氏の家系で、安宅氏は第十三代当主である。この記録は明治四十五年七月に安宅氏が語ったもので、この時点でまだ兜は戸川家を出ていない。安宅氏は大正四年四月に兜を久能山に奉獻し、九年後の同十三年十二月八日、行年七十歳をもって永眠されている。」

■竹井将監の五輪塔 (町指定重要文化財)・・・ 備中高松城の戦いの「冠山戦い」で敗れた毛利方・竹井将監の墓。 敵ながら勇敢だった竹井将監を誉め、秀吉が贈った金で建てたと言う。 古代の近衛府という役所は、今で言えば皇宮警察。近衛府の三等官を「将監(しょうげん)」という。戦国時代には古代の官職を勝手に名乗ったり与えたりする者が多かった



p 17 (戸川記念館から頂いた資料) 参照

※遠藤周作「反逆」に描かれた竹井将監・・・ 遠藤周作は井原市美星町の小笹丸城主・竹野井(竹井)氏の子孫にあたる。詳しくは、母方の遠祖にあたる。城跡には「小笹山城跡」という、遠藤周作が建立した小さな石碑が立つ。遠藤周作はこの美星町を何度も訪れ、小説『反逆』を執筆した。自らの分身の竹井藤蔵を準主人公として、摂津守・荒木村重に仕え、八面六臂の活躍をさせる。竹井藤蔵は最後に、竹井将監と名乗り冠山城の戦いで加藤清正と一騎打ちをして討たれた。



●千光寺は竹井将監の菩提寺。傍に貝塚が、境内に日本廻国塔が建っている。この廻国塔は、法華経を六十六カ国の霊場に一部ずつ納める目的で諸国を廻ったことを銘文とした塔である。 俗称の「六十六部」とは、法華経を携え諸国を遊行して、修行を行った半僧半俗の仏教者のことである。その因習は室町時代から江戸時代にかけて盛行した。僧侶のほかにも独特な服装をし、鉦を叩いて金銭を乞う者もいた。

■金毘羅街道の燈籠と道標・・・岡山の城下から



四国への船便が出る下津井に至る金毘羅街道は、庭瀬経由の北回りと妹尾経由の南回りがあり、早島で合流した。江戸時代の後期から盛んになった金毘羅詣では、児島半島の由加山参りと相まって、早島は両社の参拝客でにぎわう宿場町となった。当時大坂で発行された「金毘羅道中絵図」には早島が記載されている。道標には「左 きびつ をかやま 右 ゆかさん こんびら」と刻まれている。



■清澄家住宅（町指定重要文化財）・・・明治41（1908）年建築の洋風2階建て住宅で、町内に



残る唯一の明治洋風住宅。眼科医院として建てられたもので、玄関を中心に両翼を張り出した左右対称の美しい景観を見せ、両翼を張り出したコの字の平面になっている。外壁は、下見板張り、窓は上げ下げ窓とし各壁面に一つずつ開けられ、内部は和風部分と洋風部分とに分かれている。玄関土間の天井は鋼板をプレスしたもの、診療室は打上げ天井、2階西側の小室は折上げ格天井にするなど特色ある天井となっている。内部の改変も少なく、明治の雰囲気は今に伝える貴重な建物である。

■龍神社・・・ 祭神：和多都美神

祭礼日：6月1日・例祭、7月第2土曜日・進雄(スサノオ)神社例祭

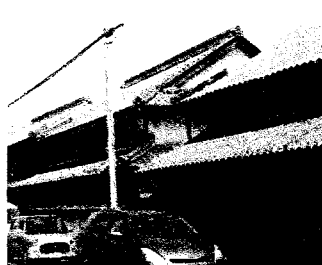
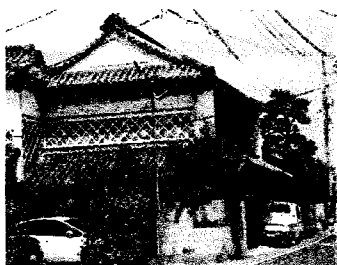
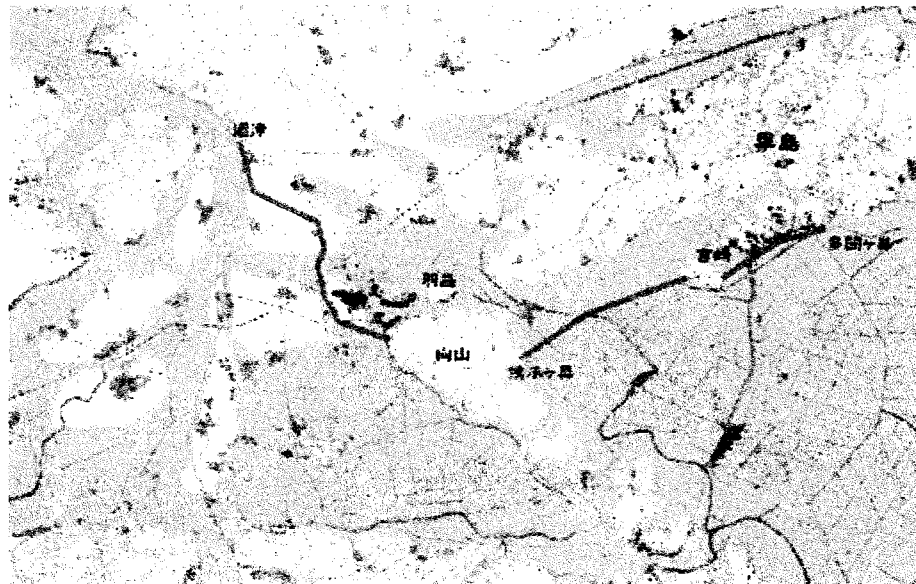
境内社：進雄神社他

由緒：延享元（1744）年 領主の戸川氏が社殿を築き和多都美神を現在の地に奉斎し、近郷三ヶ村の水神として尊崇された。 旱魃（かんばつ）の時は近傍の農民が殊更に尊崇厚く例祭には参拝者が多く、盛儀を極めた。文政2（1819）年再建。 昭和42年まで当地は小高い山になっており、頂上の神社からは遠く常山付近まで眺望できたが、山裾の崩落が相次ぎ周囲に危険が及ぶ為、山を削り現在の境内地を造成し、同43年社殿を始め工作物等を移築した。 また、鶴崎神社の神幸祭には折り返し地点の要所として、当社と進雄神社(境内神社)の間に御旅所が設けられている。7月第2土曜日に行われる進雄神社の例祭には疫病除けの赤幟札が参拝者に授与され、多くの参拝者で賑わう。 平成13年5月幣殿、拝殿屋根改修。

■宇喜多堤（うきたつみ）・・・岡山県倉敷市及び都窪郡早島町にあったとされる、汐止め堤防である。戦国大名である宇喜多秀家の命



により、天正17年（1589年）頃、児島湾の干潟を新田開発するために築かれた。堤防のルートは二つあり、一つは酒津（倉敷市酒津）から浜村（倉敷市浜町）経由で向山山麓（倉敷市船倉町付近）。もう一つは塩津（都窪郡早島町）から宮崎（都窪郡早島町）の鶴崎神社経由で向山山麓の岩崎（倉敷市二日市付近）に築堤された。さらに、高梁川の水を干拓地に引くため酒津から八ヶ郷用水が開削された。これにより現在の総社市東部・倉敷市中心部・早島町北部が耕作可能地となった。



【早島の古い家屋】

■早島町歴史民俗資料館・・・い草製品、織機、古農具、畳表資料を展示。早島町の伝統的地場産業に

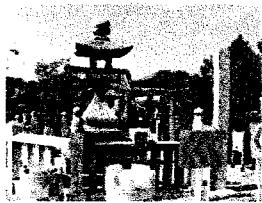
関する歴史・民俗資料を収集展示した施設で、全国でも珍しいい草資料館。



■早島町花ござ手織り伝承館・・・ 早島伝統の花ござ手織り技術を保存継承する伝承館。手織り機を用いた花ござの制作のほか、ミニ機を用いて地元の小学生などに手織りの体験教室を開催している。

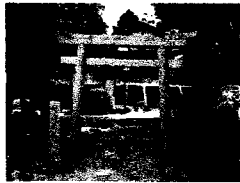
■舟本の港跡・・・かつて早島陣屋の川港としてにぎわった跡。常夜灯に「金毘羅大権現」と刻まれ、航海安全を祈願して建立した。「文化2（1805）」とある。

往古は海に面した町は、干拓が進むにつれて海から遠ざかるため、舟が航行できる汐入川は町の発展に不可欠だった。早島でも汐入川を利用した舟運



が開け、宝暦11（1761）年、寛政4（1792）年に早島から大坂に畳表を搬送した旨の記録がある。安政3（1856）年には船着き場18mを石垣に修復した。舟運は宇野線の開通した明治43年以降も利用されていた。

■弁才天港跡・・・舟本とともに早島の河川舟運の要所であった。巖島神社の境内に残る燈籠の竿は、天保7（1836）年に讃岐の船頭「灰船中」が寄進したものである。当地は金毘羅往来の街道に面していて、宇喜多堤からこの港へ、さらに南下して茶屋町、天城へと街道は続いた。境内の巨石群は海の荒波によって山肌が削り取られた跡といわれ、早島十景の一つ「弁天の浮見堂」として知られる。



※「灰船中」・・・讃岐の三豊郡和田浜（現・観音寺市）は綿の産地であった。土壌の改良のために大量の灰を必要としたので、早島の畳表の不良品を焼いた灰を買い付けに来た。

○弁才天・・・インドから伝来した女神。穀物を豊に実らせる河の神である。巖島神社の祭神の一柱である市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）と習合（同一視）されている。

■鶴崎神社・・・

祭神：大吉備津彦命荒魂

由緒：御祭神は大吉備津彦命。第7代孝靈天皇の第3皇子。第10代崇神天皇の御代4人の将軍を選んで北陸（大彦命）・東海（武渟川別命）・西海道（吉備津彦命）・丹波（丹波道主命）に派遣して天下を鎮定する事となった。命はその四道将軍の一人として西道（吉備国・現在の岡山県、兵庫県西部、広島県東部、香川県島嶼部）に下られ、当時の有力な強賊（豪族）蟹島帥（カニタケル）を征伐して、この国を平定された。その後吉備国に永住し国の統治にあたり281歳の長寿を保ったとされる。

当社は、貞和6年2月21日（1350）に吉備津神社から吉備津彦命荒魂（丑寅御崎大明神）を勧請したのが創建とされ、その後元中元年（1384）小社であった八幡神社（品陀和氣命）を再建し、現在の両社宮の形式となり御崎宮と称した。

文禄2年（1593・安土桃山）宮崎城主・高島市正貞政、安原備中守の手によって両社改築。慶長8年（1603）安原和泉守が八幡神社を再建。享保4年（1719）両社再建。明治初年に社名を鶴崎神社と改める。

明治40年神饌幣帛供進社に指定される。昭和10年随神門改築。早島の総鎮守として守られている。昭和46年本殿屋根銅板葺替。平成10年社務所移して改築。

春、秋の大祭には吉備津神社の七十五膳据神事と同様に御盛相（おもっそう・米を蒸し円筒形の型枠にはめ押し抜いたもの）を御膳に盛ってお供えする特殊神事供膳祭（きょうぜんさい）が古式に則り行われる。また、秋祭りの神幸祭は寛保元年（1741）から行われており、早島町の秋の風物詩として大きな賑わいを見せる。（「境内由緒書き」より） 双殿造の社殿は2009（平成21）年に改築された。

代表的宝物

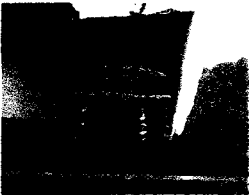
正徳6年（1716）、早島戸川家4代・安晴が願主として奉納したといわれる上野寛永寺の境内を描いた絵馬（町指定重要文化財）、明治23年に太田利平太が奉納した早島十景扁額（町指定重要文化財）、東参道常夜灯（町指定重要文化財）ほか



〈東参道常夜灯〉安政3（1856）年の建立。畳間屋が航海の安全を祈願して児島湾が見渡せるこの地に奉納した。南側の常夜灯には早島の間屋8軒が、北側には江戸・大坂の間屋11軒が名を刻んでいる。南側の常夜灯には「尾道石工 常助」の文字が読める。

※境内の5体の狛犬についてp19・20参照

〈吉備津彦命の休息岩〉 四角い形をした「休息岩」。鶴崎神社に伝わる賀陽（かや）氏の古書によると、吉備津彦命が休息した岩の跡に、鶴崎神社の本殿を建築したと記されている。2008（平成20）年の社殿建築のとき、土中からこの「休息岩」が出土。貴重な歴史遺産として本殿脇に安置されている。



※安原備中守・・・

安原伝兵衛は慶長7（1602）年、石見銀山の採掘量が減り続けたことにより、清水寺（せいすいじ・島根県太田市）に祈願した。祈願すること七日目に、「銀の釜」を賜（たまわ）る夢を見て、その夢を大久保石見守に申し上げ、資金を得て釜屋間歩を発見し、大量に銀を採掘した。慶長8年（1603）徳川幕府に多額の運上金を納めたことから、伏見（ふしみ）において家康から胴服（どうぶく）辻ヶ花染丁字文胴服（つじがはなぞめちようじもんどうぶく）と扇子（せんす）を賜った。その後、胴服は清水寺に納められ重要文化財に指定された。早島町の東部、塩津地区の出身であると伝えられており、鶴崎神社の屋根葺き替えや毘沙門堂建造に尽力した。

〈鶴崎神社の梵鐘〉・・・天正3（1575）年、備中松山城主・三村元親と毛利氏との最後の決戦「常山合戦」の際に笠岡城主・村上景広がこの鐘を早島から戦利品として押収し、「時の鐘」として城で使っていた。毛利氏に従軍した村上氏は、関ヶ原の合戦の後に笠岡を追われ、この鐘は笠岡の遍照寺の末寺の西明院に吊られていた。後1600年代末頃に遍照寺に移し現在に至っている。

備中州都邪撫河那牟島庄
 丑寅御前鐘
 奉鐘以信心福業之施財者也
 永享壬子歲十月廿三日
 龍書等照之
 一應鐘声 願壽增長
 願三界吉 願度菩提

梵鐘に刻まれた銘



【岡山県指定工芸考古品 遍照寺の梵鐘】

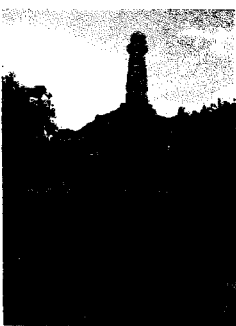
遍照寺の梵鐘は備前州都邪撫河那牟島庄に在りて
 丑寅御前鐘と云ふ也其鐘の銘を録するに
 奉鐘以信心福業之施財者也
 永享壬子歲十月廿三日
 龍書等照之
 一應鐘声 願壽增長
 願三界吉 願度菩提

■妹尾・・・古代は児島湾北西部の干潟であった。平安末期に橋兼門が開発し、その地名、瀬尾ノ郷を自分の姓にした。彼は平治の乱の時、源義朝に加担したために抹殺されたが、妹・保子が鳥羽院に官仕えして一児をもうけた。その子が平清盛に育てられ、後に瀬尾太郎兼康と名乗り瀬尾ノ郷の領主になり、後に妹尾兼康として妹尾繁栄の基礎を築いた。 後、宇喜多氏の支配を経て、慶長5(1600)年に庭瀬藩領、寛文9(1669)年からは1500石で分家して旗本戸川氏領となり、明治を迎える。現在の妹尾駅から南あたりは児島湾の北端に位置し、文政6(1823)年に興除新田が干拓されるまでは魚貝類の干潟漁が中心であった。 平家が壇の浦で滅びると源頼朝によって「妹尾荘」は崇徳院、法華堂(京都)へ寄進された。

《平家物語巻八》 「兼康が知行仕候し備中の妹尾は馬の草飼よい所て候」

江戸時代中期までは漁村であったが、干拓による新田開発により漁場が減少していった
 寛政10(1798)年の記録では、漁師350軒・1800余人・漁舟100隻

◆<妹尾のルーツ>妹尾太郎兼康



妹尾兼康は『保元物語』・『平治物語』・『平家物語』・『源平盛衰記』など平安末期を舞台とする戦記物語に見える。特に『平家物語』では、巻八に「瀬尾最期」という一節を設けて兼康の最期を描き、木曾義仲をして「あっぱれ剛の者かな。是をこそ一人當千(とうせん)の兵(つわもの)ともいふべけれ」と言わしめたのであった。

『保元物語』には、安芸守・平清盛に随った兵のなかに「瀬尾兼康」の名前が見え、『平治物語』では、平重盛に付き従った侍の中に備前の難波二郎経遠(つねとお)・同三郎経房とともに「妹尾太郎兼康」の名前がある。兼康は備中妹尾郷を基盤とし、備前の難波氏らと早く平氏の家人となっていた。 安元3年(1177)鹿ヶ谷での密議が露頭して大納言・藤原成親らが捕えられた時には清盛の命で成親を呵責し、鬼界ヶ島

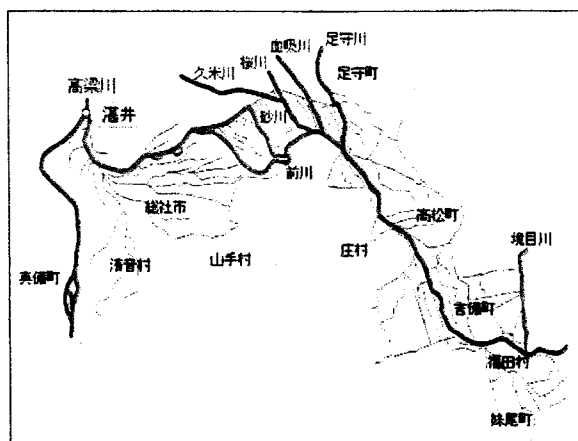
へ流罪となった成親の嫡子・丹波少将成経(なりつね)を一時備中瀬尾へ預かっている。清盛の信頼が厚かった所為であろう。 寿永2年(1183)倶梨迦羅(くりから)が谷(富山県)で木曾義仲の軍勢に敗れ、義仲配下倉光成澄(くらみつなりみず)の捕虜となって義仲軍に同道する。しかし、平氏を追って義仲の軍勢が備前三石宿に到着した夜、「妹尾がしたしき者共」と謀って逃亡、備前・備中・備後三国の兵二千余人を集めて福隆寺縄手(ふくりゅうじなわて)、笹の迫(ささのせまり)を城郭に戦って敗れ、さらに板倉でも敗れて一旦は敗走するが、肥満のため動けなくなった嫡子宗康を見殺しにできず引き返して討たれた。義仲の言葉はこの時のことであった。

平成3年8月から4年にかけて、岡山市教育委員会は、同校の給食調理施設建設に先立って、校庭にあった吉野口遺跡を発掘調査した。ここから刃傷や殴打され、鋭利な刃物で頸椎から切り落とされたとされる頭蓋骨が出土し、岡山理科大学での鑑定の結果、骨は40～70歳の男性ものと推定され、一緒に出土した鎮魂の祭祀に使ったと思われる素焼きの土器の分析から、埋葬時期は12世紀の後半と判明した。兼康の宝篋印塔と云われる墓碑は、明治期に同校の敷地を拡張した時に移されたとも云われ、この頭蓋骨は兼康のものに間違いなかろうと云うことになっている。 妹尾兼康は妹尾辺の開発領主といわれ、総社市井尻野の湛井堰で取水する十二カ郷用水は妹尾兼康が妹尾辺を開くために整備したと伝えられている。湛井堰の守護神井神社境内に「兼康神社」が祭られているのはこのためである。 妹尾兼康について触れた著作では、前掲の戦記物語のほか、『悲運の平将「妹尾太郎兼康」評伝』(同前峰雄著)、『備中湛井十二箇郷用水史』(藤井駿・加原耕作著)ほか多数がある。



●妹尾の高尾地区には、伝・妹尾兼康の館跡があり、地域の人たちによって石塔(写真)が祀られている。

※「湛井十二ヶ郷(たたいじゅうにかごう)用水」・・・



高梁川(総社市井尻野の地)の湛井堰(たたいぜき)で取水する十二箇郷用水路の改修は妹尾兼康が行っている。基幹水路延長は岡山市妹尾までの18キロに及ぶ。

寿永元(1182)年に妹尾兼康が目論見(もくろみ)し、福井二郎左衛門が奉行となって築造したという。湛井堰(総社市井尻野)の守護神・井神社境内に「兼康神社」が祭られている。湛井十二ヶ郷用水は図に示すように、高梁川の水を各村に分水しながら、前川(まえかわ)(幹線水路)を通して足守川(あしもりがわ)へ運び、さらに足

守川に設けられた福富堰から妹尾用水で下流に運ぶという壮大、かつ複雑な構造となっている。いずれにせよ、この用水の流路は、かつて高梁川が自然氾濫を繰り返していた頃の旧流路を利用して整備したものと考えられる。 近郊の人々は妹尾兼康公の偉業を讃え、恩恵に感謝して、井神社、

兼康神社として合わせ祀っている。毎年6月1日には水氏子関係者による「初堰祭」を斎行し、当年の豊かな水の恵み、五穀豊穡、家内安全を祈願した後に高梁川から取水を始める。

※図の市町村名は昭和の合併以前 出典：『備中菟井十二箇郷用水史』

■御前神社・・・

祭神 彦五十狭芹彦命（ひこいさせりひこのみこと）（大吉備津彦命）

由緒 当社は、吉備津神社の摂末社七十二社の一社であり妹尾西磯の鎮守社として祀ったものである。

創建は定かではないが、当社燈籠に「開闢（かいびやく）神亀三年春三月」とあり、聖武天皇の御代約千三百年前にはこの地に社殿が建立されていたことがうかがえる。また伝説によれば、吉備津彦命は汗入の沖で賊将梟帥（たける）をせいばいしたとき大風により船が転覆しそうになったが大亀に助けられた。やがてその磯の前の三つの小島に住吉三神を祀り、汗入の浜に豊玉彦命・豊玉比売命を祀った。その後現在の地に社殿を建立し吉備津彦命を祀ったとされている。現在でも、三つの小島の証として、境内には波に洗われた大岩・土中には多くの貝が現存する。

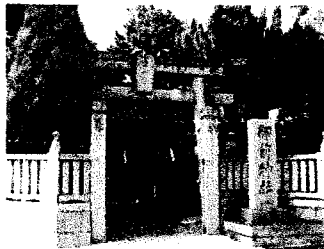
社殿 両社宮と呼ばれ二つの社を一つの拝殿でつないでいる。

摂社 大綿津見神社（豊玉彦命） 俗称龍王宮 末社 恵比須神社（事代主命） 天満宮（菅原道真公） 巖島神社（市杵島姫命）

秋季大祭 十月十日 月次祭 毎月一日

文化財 児島湾漁撈回漕図 一面（県重文）・・・寛政10（1798）年に備中国都宇（つう）郡妹尾村（現岡山市妹尾）の漁師たちが絵師の玉峰に描かせて、御前神社に奉納した絵馬縦105cm、横210cm。児島湾での漁法や海上交通の様子がよく分かる貴重な資料である。

御神徳 長寿の守護神・産業の守護神・安産育児の守護神・学業の守護神（現地案内板より）



鳥居



かつては港だった現・妹尾駅付近に建っていたが
宇野線が施設された時に境内に移転した常夜灯



かつて海だったなごりの磐群

■啓運山盛隆寺・・・妹尾にとって、象徴的な史跡であり寺院である。

1610年、庭瀬藩主・戸川達安は、宇喜多秀家の従兄弟である宇喜多詮家（坂崎出羽守直盛の名で知られる）の正室である妹が逝去した際に母・妙承尼（常山城主・戸川秀安の正室）とともに、妹の冥福を祈るために3000余坪の土地を寄付・日鳳上人を開祖を迎え創建した。

以前この一帯は真言宗の信徒だったが戸川氏の勢威と、上人の徳化により寺院・檀家が日蓮宗に改

宗、現在でも「妹尾千軒皆法華」といわれるほど日蓮宗への信仰心が厚い。

毎年11月22・23日には日蓮聖人の命日法要である「御会式」が行われ、露店が並ぶなど地区全体が歩行者天国となるほど賑わう。

仁王門かつてこの寺が真言宗であった名残りで、安置されている仁王尊は外敵を払って仏を守護するものとされ、万物はすべて表裏あり、これを見抜いて仏を保護し、信じない者は門前で追い払うものだと言い伝えられている。現在のものは1761年に改築されたもの。門をくぐると参道の両脇に浄園院・善立院・智応院の塔頭が並ぶ。本堂を中心に方丈・観音堂・三十番神堂・七面堂・鐘楼などの建物がある。本堂右側にある宝塔は日本最大級のもの。



【仁王門】



【本堂】



【南無妙法蓮華經の宝塔】



【戸川達安の墓標】

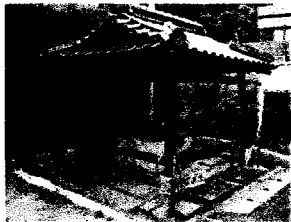


【妹尾兼康の公徳碑】

○p18に墓所の配置図 (盛隆寺でいただいた資料)

■妹尾陣屋跡・・・古い井戸が残されているだけである。妹尾の知行門は明治になって小田県庁門として移築され、現在は笠岡小学校にある。陣屋跡の裏山に標高40m位の小高い山があり、戸川氏の屋敷神として祀られた稲荷神社があり、平安時代に妹尾氏が築いた州浜砦跡があるが荒廃している。陣屋の井戸は覆屋と井筒で構成される。覆屋は入母屋造り瓦葺、4本柱の間隔は2.82

m、2.62mの長方形となっている。井戸の地上部分の井筒は、花崗岩の切り石で一辺が1.22mの正方形である。昭和47年 岡山市指定有形民俗文化財に指定された。



【陣屋の井戸】



【かつての陣屋の門 現・笠岡小学校の正門】



【妹尾の古い家並み】

竹井将監と五輪塔

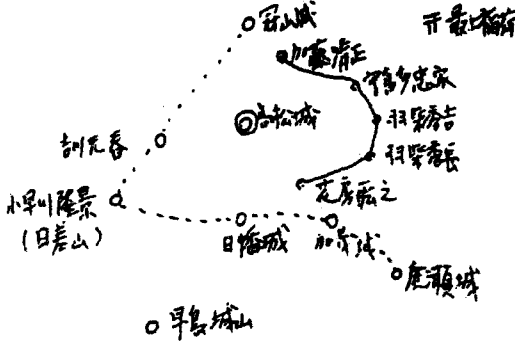
☆備中高松城水攻めと冠山城

羽柴秀吉は、織田信長の命令で、天正10年3月15日姫路を出陣、4月に入り高松城を攻める前に、その枝城を攻略する作戦にでた。彼は、子飼いの加藤清正に命じ、備中七城の一つ冠山城(現、下足守)を攻撃させた。しかし、竹井将監らの守る冠山城の守りは堅く、なかなか落とすことができない。

4月24日夜、寄せ手の忍者が城の火薬庫を爆破、城内は大混乱になった。

その混乱のなかで、竹井将監は敵将加藤清正と壮絶な一騎打ちの末、討ち死にする。衆知のように、清正は、後に賤ヶ岳の七本槍と謳われ、九州熊本の城主となった猛将である。この清正と互角に戦った将監を、秀吉は賞賛し、供養のためとして、金50両を与えた。将監の法事は吉備津の賀夜坊で行われ、後に供養塔が早島の千光寺内に設けられた。

しかし、早島城主の竹井将監が、なぜ冠山城で討ち死にしたのか。高松城救援の毛利軍の戦線は、因のように早島よりは10キロメートル以上も離れており、早島は重要な拠点ではなかった。したがって、最前線でもかもしない加藤清正の前面にある冠山城へ援軍として派遣されたいのである。



☆竹井将監の謎

1. 将監: もともとは、個人の名ではなく、近衛府の役人の階級
の名称であった。したがって、名は不詳である。

2. 出自の謎

竹井将監は、早島土着の武士ではない、というのが定説である。では出身はどこか。

・芥川賞作家 遠藤周作氏の説

竹井将監は、小田郡美星町小笹丸の竹井一族の出身で、早島の城山は、その出城であった、とする。

ちなみに、遠藤周作氏の母の実家が竹井一族であり、周作氏も小説「反逆」の取材の途中、千光寺に参詣されたことがある。

・郷土史家で、元町議会議員の故佐藤季雄氏の説

竹井・林・武野・武・小林の姓は同族であり、小田郡矢掛町林の神子ヶ山城主の武野宗円と竹井将監とは同一人で、早島城山は、その出城である。早島の城山には、稲荷社が祭られているが、宗円の神子ヶ山城にも同じく稲荷がまつられていた。早島の稲荷社は、神子ヶ山城の稲荷を勧請したものであろうと、されている。

いずれにしても、竹井将監は、小田郡あたりの豪族の出身で、毛利の勢力が東へ伸びるにしたがい、その先兵として、早島へ移住してきた可能性が強いのである。

3. 五輪塔の謎

竹井将監の供養塔とされる五輪塔は、早島町史によれば、「その形態からみると、南北朝にさかのぼる時期ではないかと思われ、竹井将監の時代よりも200年は古いことになろう。」と推定している。

だとすれば、多分戦国時代には、この五輪塔の主は不明になっており、五輪の立派さから、将監の供養塔に擬されたものであろうか。あるいは、戦国の頃、ある建造物例えば廃城となった城の一部が、他の建造物例えば神社の一部に利用されることなどは、珍しくなかったから、石造物等も既存のものを他のものに流用するというようなこともあったのではないかと考えられるのである。

☆竹井将監の後裔

旧鴨方の豪族であった高戸家の系図には、竹井将監の娘が高戸家に嫁し、二男一女をなしたとある。高戸家の子孫は、現在早島の若宮に居住されている、とのことである。

また、将監の長女が、倉敷の大橋家の先祖に嫁いだという、伝承もある。現に竹井一族を称する人達も多く、毎年、千光寺に先祖供養のため参詣にこられるということである。

☆高松城攻めに直接参加した毛利方の中島元行の「中国兵舌し番己」に竹井将監の奮戦が語られているから、謎は多いとはいえ、彼の実在はまず間違いないところである。

大円院…妹尾六代達木
 建教院…妹尾七代達裕
 栴翁院…妹尾五代達廣
 亮円院…妹尾八代達利

五ノ丸
 四ノ丸
 三ノ丸



一ノ丸
 二ノ丸
 三ノ丸
 四ノ丸
 五ノ丸
 六ノ丸
 七ノ丸
 八ノ丸
 九ノ丸
 十ノ丸
 十一ノ丸
 十二ノ丸
 十三ノ丸
 十四ノ丸
 十五ノ丸
 十六ノ丸
 十七ノ丸
 十八ノ丸
 十九ノ丸
 二十ノ丸
 二十一ノ丸
 二十二ノ丸
 二十三ノ丸
 二十四ノ丸
 二十五ノ丸
 二十六ノ丸
 二十七ノ丸
 二十八ノ丸
 二十九ノ丸
 三十ノ丸

三ノ丸

◎以下の写真と狛犬の紹介は、HP「備中狛犬探検隊・会報127号 2010年2月15日」より



調査NO・231

石段下狛犬。

跳ね上げ型・

明治28年

・寄進者・阿形、大橋勉、畔形、 渡辺浅次郎

高さ・阿形、136cm、畔形137cm

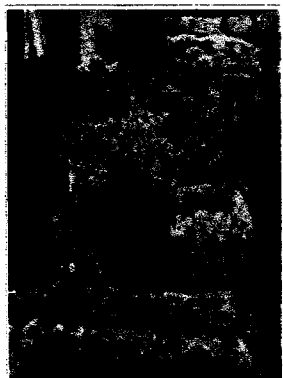


調査NO232

昭和8年・近江国大寶神社の国宝木製狛犬を模して制作する。石工 原 福蔵

寄進者・阿形、木村竹太郎・畔形、木村浅五郎

本体高さ・127cm



調査NO. 233

嘉永5年建立・尾道型狛犬

寄進者・阿形、米屋元蔵ほか5名・畔形、元屋定吉ほか4名

本体高さ。阿形、86cm・畔形、80cm



調査NO・234

本殿前狛犬・形も石質も始めて見る狛犬です。

寛政5年大坂形、茶色の砂岩(産地不明)

寄進・阿形、上斗屋傳兵衛ほか3名・畔形、関屋傳右衛門ほか4名

高さ・阿形79cm・畔形、81cm



調査NO・235

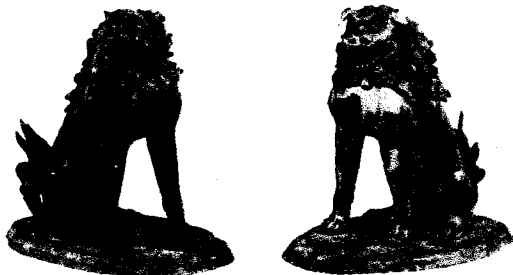
大正15年5月建立の出雲型狛犬。
寄進者・宮崎中
角なし
高さ・阿形、101cm・吽形、98cm

■大寶神社

滋賀県栗東市の旧中山道沿いにある神社。祭神は素盞鳴尊（すさのおのみこと）、稲田姫命（いなだひめのみこと）

大寶神社には社宝とされる2対の木造狛犬（こまいぬ）があり、このうち1対が平安時代作で像高47cm、国指定の重要文化財である。1体は金色をしており、もう1体は銀色に彩色され、緑青で手描きなども施されていたらしいが、残念なことに今は剥け落ちて、下地の漆地が露出している。

<重文>境内社追神社本殿 木造狛犬（重要文化財の狛犬は京都国立博物館に寄託されている）



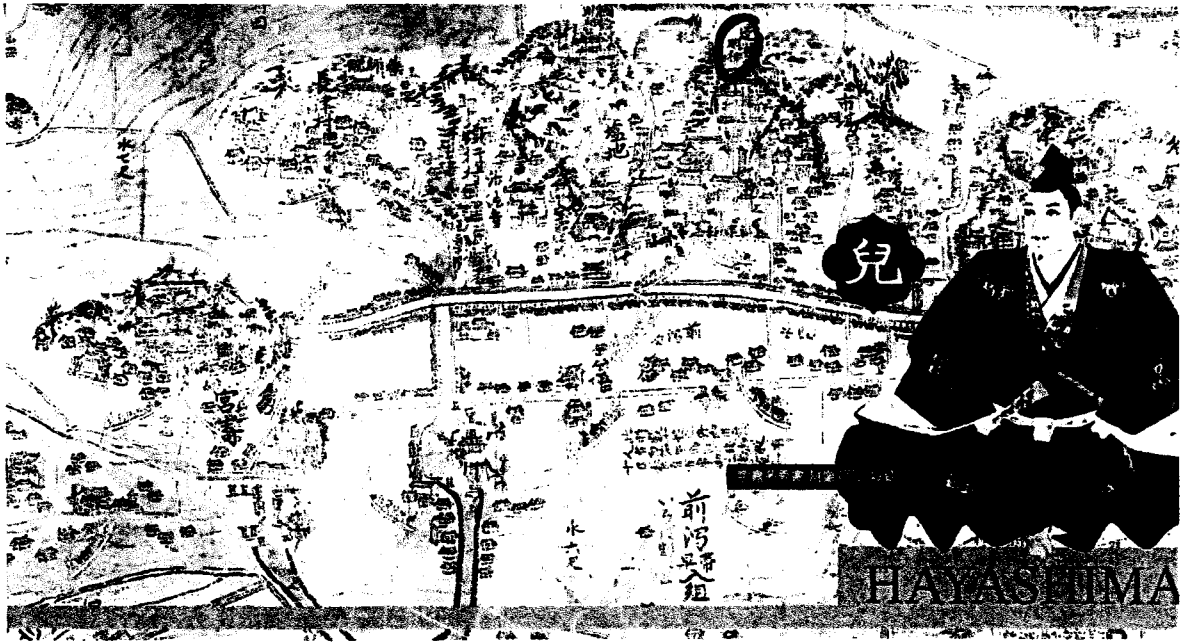
国指定重要文化財 木造狛犬 一対

和様を捨てさった、全く新しい獅子像が12世紀末に創り出された。本像は阿形と吽形の組合せであるが、ともに無角なので、獅子・狛犬の1対ではなく、この時期には珍しい奈良時代風の獅子1対の遺例である。

阿形は耳を伏せ、吽形は耳を立てて対照を見せ、いずれも拝者の方へ顔を向け、それに合わせて拝者側の前肢を少し引き、反対側の肢を前に出す。頭部は小振りだが、上半身を大きく、下半身と四肢を細身とした軽快な体つきで、たてがみの太々とした毛束を震わせて威嚇する獠猛さが顔に集中してあらわされる。唐風表現に立脚した俊敏な獅子の姿を表現する。

～京都国立博物館より

●このページの図は早島町作成の「早島町 宇喜多堤と児島湾干拓」のパンフレット』より一部を引用しました



明治30年代の児島湾(児島湾開墾付近図)

